令　和　５　年　度

令和５年１月 22 日実施

入　学　試　験　問　題

（看護学科３年課程）

国 語 総 合

◎指示があるまで開いてはいけません

注　　意

１　解答用紙には、氏名・受験番号・志望校名が印刷されているので、あなたの解答用紙かどうかを確認すること。

　なお、氏名欄、志望校名欄には、氏名、志望校名を漢字で正確に記入すること。

２　この問題は、表紙を除いて１ページから 16 ページまであるので確かめること。

３　試験の時間は、９時 00 分から９時 45 分までの 45 分とする。

４　解答には、**ＨＢ又はＢの鉛筆**（シャープペンシルも可）を使うこと。

５　問題は、５肢択一式により出題されている。解答方法は、次のとおりとする。

(1)　５肢択一式問題の正解は、各問題とも１つである。解答用紙の所定のマーク欄に、正解の番号を１つだけマークすること。２つ以上マークされている場合は無得点とする。

(2)　解答用紙の〔記入上の注意〕をよく読んでマークすること。

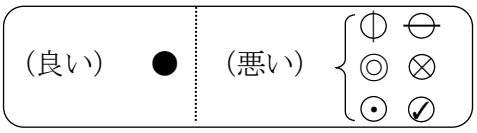
例　〔問１〕日本の首都は次のうちのどれか。

①　京都　　②　福岡　　③　東京　　④　大阪　　⑤　神戸

正解は「③　東京」であるから解答用紙のその問題番号の次にならんでいる

マーク欄　①　②　③　④　⑤　の中の　③　を鉛筆で　●　のように

マークして　①　②　●　④　⑤　とすればよい。



（良い）のようにマークする。
（悪い）のようだと機械で読み取れないことがある。

既にマークした解答を消す場合は、**プラスチック消しゴムでよく消すこと。**

国語総合

一　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

一九九〇年代に入った頃から、上野村では、(1)イノシシが畑を荒らすという現象が多発するようになった。実際には上野村だけではなく、全国のイノシシ生息域で同じような現象が発生していたのだが、村人が受ける被害は(2)甚大なものがあった。上野村でも村人は顔を合わせると「困った」と話し合い、その対策を教え合った。私がよくすすめられたのは、(注1)落とし穴をつくる、というものだった。イノシシは山に道をつくり、そこを歩く習性をもっている。このケモノ道のトチュウ[a]に落とし穴をつくれば、確実にホカク[b]できるというものである。

私はこの方式を何人もから推薦されたのだけれど実行はしなかった。なぜなら、そうすすめる(3)村人自身が、自分の畑もイノシシに荒らされているというのに、落とし穴をつくってはいなかったからである。とすると、ここには何が隠されているのか。それを整理すれば次のようになる。

村人と山の動物との関係は、その動物が畑などを荒らすようになれば、人間と害獣の関係になる。その意味ではイノシシは害獣なのである。

A　それ以前のこととして、人間と山の動物は、共に村をつくり、村で暮らす仲間と考えられている。村という言葉の意味は、伝統的には、人間の里のことではなく、自然と人間の里である。だから村人は、イノシシも自分たちの仲間だという気持ちをもっている。

B　今日の問題として、人間のさまざまな活動がイノシシの暮らしを圧迫し、その結果イノシシが畑に降りてきているのではないかという感覚も、村人はもっている。もしそうならイノシシは加害者である前に被害者である。

ところが昔から、冬の猟期には村人はイノシシを撃ってきた。ここではイノシシは狩猟対象であり、村人にとっての冬の栄養源であった。ただしここには作法がある。撃ったイノシシは、そのすべてを利用しなければならないという作法が。

イノシシはある種の関係のなかでは害獣になり、また別の関係のなかでは仲間に、さらに別の関係のなかでは狩猟対象になるのである。村人とイノシシとのそれぞれの関係によって、みえてくるイノシシの姿が変わる。関係自体が多層的であり、判断も多層的になるといってもよい。

ここで問題になるのは、このような多層的関係のなかで、落とし穴をつくることは折り合いになるかである。残念ながらそれは駆除の方法にはなっても、折り合いにはならない。なぜならイノシシが畑に姿をみせる春から夏の間は、イノシシの肉はまずくて利用できないから、退治するだけになってしまうのである。そのような追いつめ方は、村

人の作法に反する。

村人は誰も落とし穴をつくろうとはしなかった。そこに多層的精神の折り合いのつけ方を、みいだすことができなかったのである。

C　折り合いとは、単なる異なる見解の調整なのであろうか。それとも、折り合いには何らかの基準があるのだろうか。

あらかじめ答えを述べてしまえば、折り合いには、それをみつけだす方程式のようなものがある。その「方程式」が、村の記憶であり歴史である。

どう折り合いをつけようかと考えるとき、村人は、どう結論づけることが自分の暮らす場にとって「おのずから」なのかを想い起こす。「おのずから」とは自然ということであり、それは自分の暮らす場にとっての自然な姿である。そして、この自然な姿とは何かを教えてくれるものが、村の記憶であり、村の歴史である。

「昔からこうしてきた」という表現を村人はよく使う。それに対してイヤミな質問をすれば、本当に「こうしてきた」のかどうかは疑わしいし、「昔」からとはいつからのことなのかも明らかではない。ただし、そんなことはどうでもよいことである。この村では、この問題は「昔からこうしてきた」と感じられること、それが記憶や歴史と合致するということであり、いまの時点のこの場において「おのずから」なのである。

畑を荒らすイノシシに対してどう対処するのが「おのずから」であり、自分たちの場の記憶や歴史と合致するのか。多層的共同体のなかでどう意思決定することが「おのずから」であり、自分たちの場の記憶や歴史と合致するのか。

ここでは記憶や歴史は、「おのずから」をみつけだす要素であり、同時に「おのずから」そのものである。記憶や歴史は「おのずから」と合致するように物語化されることによって、自分たちの場の記憶や歴史になった。

（内山節『里の在処』より）

（注1）落とし穴 ―― 現在は法律により、使用が禁止されている。

〔問1〕 (1)イノシシが畑を荒らすという現象が多発するとあるが、上野村の村人にとってのイノシシの存在について説明したものとして最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 村人にとって、イノシシは村に重大な被害を及ぼし続けてきた害獣であり、必ず駆除しなければならない存在。

② 村人にとって、イノシシは村人の様々な活動により暮らしを圧迫され続けてきた被害者であり、保護すべき存在。

③ 村人にとって、イノシシは共に村をつくりながら暮らしてきた仲間であり、村の暮らしにおいて欠かせない存在。

④ 村人にとって、イノシシは害獣とも、仲間とも、狩猟の対象とも言え、関係が状況によって変化する存在。

⑤ 村人にとって、イノシシは貴重な栄養源であり、季節によって狩猟の仕方を変える必要がある厄介な存在。

〔問2〕 (2)甚大とあるが、この言葉の対義語として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 狭小
② 僅少
③ 希薄
④ 若干
⑤ 軽微

〔問3〕 トチュウ[a]、ホカク[b]、イヤミ[c]の傍線部に該当する漢字を含む熟語の組み合わせとして正しいものは、次のうちのどれか。

① a 壁をペンキでト装する。 b 壊れた屋根をホ修する。
c 自己ケン悪から立ち直る。

② a 仕事を終えて帰トにつく。 b 野球のホ手として活躍する。
c 仲直りして機ゲンを直す。

③ a 事業は中トで見直された。 b 警察官が犯人を逮ホする。
c ケン案だった問題が解決した。

④ a ト労には終わらせない。 b 製品の品質をホ証する。
c 味気無い生活にゲン滅する。

⑤ a ト方もない努力。 b 虫をホ食する動物。
c ケン虚なふるまいをする。

〔問4〕 村人自身[3]が、自分の畑もイノシシに荒らされているというのに、落とし穴をつくってはいなかったとあるが、その理由として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 落とし穴を使う方法は、村人のイノシシへの仲間意識を質的に転換させるものだから。
② 落とし穴を使う方法は、銃を用いる方法よりも重労働となり、手間のかかるものだから。
③ 落とし穴を使う方法は、肉がまずくなり、イノシシの利用価値を損なうものだから。
④ 落とし穴を使う方法は、イノシシが畑に姿を見せる冬の時期に用いるのが困難だから。
⑤ 落とし穴を使う方法は、駆除するだけの行為となり、村人の作法に反するものだから。

〔問5〕 空欄 A 、 B 、 C に当てはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものは、次のうちのどれか。

① A だから　B ただし　C つまり
② A しかし　B すると　C ところで
③ A ところが　B しかも　C ところで
④ A ところが　B ただし　C たとえば
⑤ A しかし　B しかも　C つまり

〔問6〕 (4)そんなことはどうでもよいとあるが、この説明として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 村人の「昔からこうしてきた」という主張の細かな点について質問することは、村人の尊厳を傷つけるものだということ。
② 村人の「昔からこうしてきた」という主張の真偽を確かめることは、折り合いを見つけ出すために必要なことではないということ。
③ 村人の「昔からこうしてきた」という主張は村の外部の人からは認められないため、確かめる価値がないものだということ。
④ 村人の「昔からこうしてきた」という主張は事実とは異なっている懸念があるため、無意味なものであるということ。
⑤ 村人の「昔からこうしてきた」という主張の詳細は村人だけが知っていればよく、外部の人が意見すべきではないということ。

〔問7〕 この文章の内容に合致するものとして最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 人間が自然と向き合うときに生み出される多層的精神は個人では折り合いをつけることが難しく、村人同士で見解を調整していく必要がある。

② 上野村の村人がもつ多層的精神は、村人が暮らす場にとっての自然な姿が体現されたものであり、村人一人一人の経験によって作り上げられている。

③ 多層的共同体のなかで「おのずから」を決定する要因は、それぞれの村に固有のもの、独自のものとしてあるのではなく、全国的に共通のものである。

④ 上野村では「昔からこうしてきた」と感じられ、村の記憶や歴史と合致し、現時点のこの場において「おのずから」であることが問題解決の対処法となる。

⑤ 上野村のような多層的な共同体のなかでは「おのずから」は村人によって決定され、記録されることによって次の世代に引き継がれていく。

二　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

中学二年生の「あたし（琴葉）」は、町工場を経営する両親と、その工場で住み込みの工員として働く十七歳の天馬と暮らしている。
ある日、「あたし」は同じ美術部に所属するさよりと買い物をし、いつもより遅くなってから帰宅する。

さよりと別れて時計を見たら、七時をすぎていた。
また、お母さんに小言をいわれる。
重い足取りで家の近くまで来ると、工場の窓から明かりがもれていた。錆びた扉から、そっと中をのぞいてみる。お父さんだったら、すぐににげるつもりだった。
「天馬……、まだいたの？」
顔を見て、ほっとする。
天馬が機械をひとつひとつのぞきこみながら、点検しているところだった。中に入りかけたあたしは、もわっとした空気にあわてて身をひいた。機械で熱くなった空気が行き場をなくして、工場の中がサウナのようになっている。
「(1)また、雑用をおしつけられたんだ……」
あたしは、同情するようにいった。
朝は始業前に行って機械の電源を入れ、夕方には機械の点検と掃除をする。日中だって、材料を用意したりはこんだり、ときには買いものなんかの雑用までたのまれて……それなのに、天馬は文句ひとついわない。
「ちがうよ。だれかにいわれたわけじゃない。オレはまだ、追い回しだから」
追い回し……古くさい言い方だ。
その昔、見習いは先輩のいうことをきいて、あっちこっち走りまわっていたらしい。だから、追い回しという。
直接教わったりせず、技術は見て盗めというのも、そのころの慣習だ。今の時代、そんなことをいったらだれもついてこないだろうと思うのに、天馬は進んでそれを受けいれているように見える。
「こうやって点検していると、機械の構造や細部がよくわかるんだ。作業をしているときは、そんな余裕もないからさ」
はじめは、優等生ぶっているだけだと思っていた。でもだんだんと、(2)それが本心であるとわかってきて……。
手先が器用な天馬は、モノ作りそのものがあっているようで、金属を見つめる目は生き生きとしている。
天馬は電源を確認し、重い扉に鍵をかけると表に出てきた。

そして、おもむろ[3]に後ろポケットから丸めたノートをとりだすと、縁石にすわって何かを書きはじめる。わずかな明かりが照らすノートをのぞきこんだら、何やらびっしりと書いてあった。

図、グラフ、数字、記号……。あたしにはさっぱりわからないけれど、どうやら仕事に関することらしいとだけは、かろうじてわかった。

「仕事が終わっても勉強？　熱心すぎやしない？」

たまには、息をぬけばいいのに。お父さんの悪口でも、グチでもいってくれれば……と思うけど、あたしじゃ相手にならないのかもしれない。

「毎日、新しい発見があるんだ。だから書きとめておかないと、もったいない」

そんなふうにいわれると、返す言葉もなかった。

ふと、天馬の指先に目が行った。機械油で黒くよごれている。

「天馬、手をよく洗ったほうがいいよ。そのうち、お父さんみたいに落ちなくなっちゃうよ」

お父さんの指は、お風呂から上がっても黒いままだ。軍手をしているにもかかわらず、染みこんだ機械油が、爪のあいだやしわの一本一本に入りこんでいる。お父さんは気にしていないようだけど、あたしはすごく気になる。そのせいで、小学校に上がるくらいから、手をつながなくなっていた。

天馬はノートを閉じると、はじめて気づいたというように、指先をじっと見つめた。

「そっか。社長の指の油、とれないのか……」

なぜかうれしそうなその顔[4]を、不思議に思う。

「ひとつの技術を身につけるにも、十年以上かかるっていわれてるんだ。オレも、早く社長みたいになりたいよ。そしたら、自分の工場をもって……」

胸がざわついた。

目標にむかって、つきすすむ天馬。

なんの夢もないあたし。

天馬はどんどん先に行ってしまう。ぜったいに追いつけない。あたしたちの距離は、永遠にちぢまらない……そのことが、なぜかさびしい。

「それより琴葉、オレに用？　どうして家に入らないんだ？」

いわれて、はっと思いだした。お母さんに、帰りがおそいとしかられそうだったから、天馬といっしょに入れば安全だろうともくろんだ[5]のだ。

思いだしたら、余計に情けない気持ちになった。

「腹へった。早く帰ろう」

天馬は察したようにあたしの前に立つと、工場の隣の一軒家にむかった。

（工藤純子（くどうじゅんこ）『てのひらに未来』より）

〔問8〕 (1)また、雑用をおしつけられたんだ……とあるが、このときの「あたし」の心情として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 父親に言いたいことを言えずに、我慢して雑用を行う天馬を情けなく思っている。

② 始業前の機械の起動から夕方の機械の点検と掃除までをこなす天馬をいたわっている。

③ ほかの工員とは明らかに異なる扱い方で天馬に接する父親に対し、怒りを覚えている。

④ 実力がないために、いつもいいように使われてしまう天馬を気の毒に思っている。

⑤ 工場の慣習を受け入れ、文句一つ言わずに点検作業をしている天馬を哀れんでいる。

〔問9〕 (2)それが本心であるとわかってきてとあるが、「あたし」が理解した内容について説明したものとして最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 天馬が自主的に追い回しの役を引き受けているのは、父親やほかの工員のことを気にかけることなく、自分一人の時間を楽しみたいと思っているからだということ。

② 天馬が父親から指示された仕事に意欲的に取り組んでいるのは、自分をよく見せようとするためではなく、仕事に本質的な意義を見いだしているからだということ。

③ 天馬が父親の命令に逆らわずに作業をしているのは、父親から叱られるのを恐れているからではなく、モノ作りそのものにおもしろさを感じているからだということ。

④ 天馬が雑用を引き受けているのは、少しでも早く仕事を覚えて将来優秀な技術者になってほしいという、自分に期待する父親の思いに気付いているからだということ。

⑤ 天馬が古くさい慣習のまま仕事をしているのは、先輩の技術を見て盗むというやり方が、工員の修業においては最も効果的なやり方だと知っているからだということ。

〔問10〕 (3)おもむろにとあるが、この言葉の意味として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① だしぬけに
② 慌ただしく
③ こっそりと
④ ゆっくりと
⑤ おおげさに

〔問11〕 (4)なぜかうれしそうなその顔とあるが、「天馬」がうれしそうな顔をした理由として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 油で汚れた自分の指を見て、自分の工場を持つという夢がいつか実現するという希望が湧いてきたから。
② 自分の指の黒い染みを見て、社長と肩を並べる技量を手にしたような誇らしさを感じることができたから。
③ 琴葉から聞いた社長の指と自分の指を比べて、自分の技術の成長を測る物差しを手に入れたように感じたから。
④ 手をよく洗った方がいいという琴葉の忠告を聞き、琴葉が自分のことを気にかけてくれていると分かったから。
⑤ 社長の指の汚れが取れないという話を聞き、自分の指の汚れはまだ落とすことができると分かってほっとしたから。

〔問12〕 (5)もくろんだとあるが、「もくろむ」をほかの言葉で言いかえた場合に当てはまる言葉として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 概算する
② 画策する
③ 主張する
④ 検討する
⑤ 交錯する

〔問13〕 この文章の表現の特徴と内容についての説明として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 第三者の視点から琴葉と天馬の様子を表現することで、お互いにわだかまりを感じている琴葉と天馬の人間関係とそれぞれの人物像を、客観的に描いている。

② 琴葉と天馬の会話を中心に物語を展開させることで、目標に向かって突き進む天馬に対して妬ましい気持ちが生じ始める琴葉の心情を段階的に表現している。

③ 町工場の社長である琴葉の父親の容姿や言動を写実的に表現することで、町工場を経営していくことの厳しさがありのままに読み手に伝わるように工夫している。

④ 会話文以外の箇所で琴葉の思いや考えを直接表現することで、明確な目標をもって生きる天馬と自分とを比較して無力感を覚える琴葉の心情を印象的に描いている。

⑤ 琴葉の口ぶりを年上の天馬と対等に話しているように表現することで、見習いという立場に思い悩む天馬のことを気にかけている琴葉の優しさを強調している。

三　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

コムギやライムギには、秋まき性と春まき性の品種[1]があります。年に二回の収穫を考える二期作の場合、春まき性と秋まき性を組み合わせます。春まき性コムギは、春から初夏までに種子をまくと、夏に成長し、秋までに結実します。

これを収穫してから秋まき性の種子をまくと、冬が来るまでに発芽して、十分に寒さに耐えられるように成長します。冬には成長を停止しますが、春早くにすばやく成長を再開し、初夏に開花、結実します。だから、初夏には、収穫できます。

しかし、秋まき性と春まき性の品種を比べると、秋まき性の方が春まき性のものより、収穫量が多いのです。秋まき性のものをまいた方が多くの収量が得られるのですから、春にまく場合でも、収量の多い秋まき性を植えると有利に思えます。それが試みられたこともありました。

ところが、春に、春まき性の代わりに秋まき性のコムギの種子をまくと、発芽して生育はしますが、葉っぱがどんどんハンモ[a]し、いっこうに花は咲きません。秋になってもつぼみが形成されないのです。

秋まき性のコムギは、生育したあとにつぼみを形成する条件として、芽生え[2]の初期に低温を感受することが必要なのです。この低温処理は、「春化処理（バーナリゼーション）」とよばれます。自然の中では、冬の低温がこの役割を果たしています。秋まき性の種子は冬の低温を受けないと、昼と夜の長さに反応して、つぼみをつくることがないのです。

もし、秋まき性のコムギを春にまくのなら、人為的[3]に春化処理をすればよいのです。春に種子をまく前に、種子に吸水させ、少し発芽状態にしたあと、冷蔵庫に入れ、一定期間の低温を与えます。そのあと、春にまくと、その年のうちに、秋に種子をまく場合と同じように、花が咲いて結実し、多くの収量が得られます。

春化処理を必要とする植物は、主に三種類に大別されます。「越冬一年生植物[注1]」、「二年生植物[注2]」、「春咲きの多年生植物[注3]」とよばれるものです。これらの植物には、規則正しい生き方を進行するために、低温を一定期間、体感するという温度プログラムが組み込まれています。だから、低温を与えないと、茎がノび[b]、葉っぱが展開するばかりで、花は咲きません。

越冬一年生植物は、芽生えが冬の寒い時期を経過し、自然の中で春化処理を受けます。二年生植物は、成長して大きくなった植物のからだが、冬期の低温を自然の中で感受します。春咲きの多年生植物は、花咲く前の冬、自然の中で、春化処理を受けます。植物たちが、冬の通過を確認して、生きていくためのしくみです。

種子たちも、冬の通過を慎重に確認して、発芽します。秋に結実する[4]多くの種類の植

物の種子は、結実後すぐに発芽せず、春に発芽します。「なぜ、秋に発芽せずに、春に発芽するのか」と問われて、「秋は寒いが、春は暖かいから」と答える人がいるかもしれません。

しかし、春の温度と秋の温度はほとんど同じです。結実した秋の気温は、春とほとんど差異がありません。温度のために春に発芽するのなら、秋にできた種子がそのまま秋に発芽してもおかしくありません。だから、「秋に発芽せず、春に発芽する」のは、春の気温が高いからではないのです。

秋に結実した種子を、採取した後、すぐにまいてみればわかります。シャーレに水を含んだティッシュペーパーを敷き、その上に採取した種子をまきます。［　X　］。試みに、もう一枚同じものを用意し、しばらくの期間、冷蔵庫に入れておきます。そして、発芽するような普通の室温に戻すと、発芽がおこります。冷蔵庫に入れておく期間が長ければ長いほど、多くの種子が発芽するでしょう。

秋に結実した種子は、低温を感受しなければ、発芽しないようになっているのです。もし結実した秋にすぐ発芽すれば、芽生えは、やがてやって来る冬の寒さで、確実にコシします。

秋に結実する種子は、見かけは完全でも発芽能力をもたず、冬の寒さを体験すれば発芽するようにプログラムされているのです。ですから、冬の間、これらの種子は寒さにただ耐えているのではなく、寒さを感受することで冬の通過を体感し、発芽の準備をしているのです。

「秋に結実した種子が低温を感受しなければ発芽しない」という性質は、自然の中で冬の通過を確認するのに役立っています。アカザ、エノコログサ、ブタクサなどの雑草種子やトネリコ、カエデ、ユリノキ、クルミ、リンゴ、モモなどの多くの種子がこの習性をもっています。いったん発芽すれば冬の寒さを逃れて移動しない植物たちが、種族の保存をはかるしくみです。

（田中修（たなかおさむ）『植物は命がけ――花とキノコの不思議なしくみ』より）

（注１）一年生植物　――　ここでは、種子から発芽して、開花・結実の後、一年以内にかれる草本植物をいう。

（注２）二年生植物　――　ここでは、発芽から開花・結実してかれるまでの周期が一年から二年近くである草本植物をいう。

（注３）多年生植物　――　ここでは、草本植物のうち茎の一部、地下茎、根などがかれずに残り、複数年茎や葉をのばすものをいう。

〔問14〕 秋[1]まき性と春まき性の品種とあるが、人為的な処理を行わなかった場合の「秋まき性と春まき性の品種」の説明として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 春まき性の品種は秋にまくと冬が来るまでに発芽し、冬には成長を停止するが春に成長を再開し、初夏に開花、結実する。

② 秋まき性の品種は春まき性の品種と異なり開花までに冬の季節を通過するが、実を収穫できるのは共に夏の時期である。

③ 小麦の開花、結実は品種により異なるため、春まき性・秋まき性の小麦を組み合わせた二期作を行うことはできない。

④ 春まき性の品種は春から秋の間に成長し結実するが、秋まき性の品種は秋から次の年の夏までの期間に成長し結実する。

⑤ 秋まき性の品種は冬の低温を感受しなければ発芽しないため、春まき性の品種と違い収穫期間が長くなる傾向がある。

〔問15〕 [a]ハンモ、ノび、[b]コ[c]シの傍線部に該当する漢字を含む熟語の組み合わせとして正しいものは、次のうちのどれか。

① a 家具を室内にハンニュウする。 b 試合をエンチョウする。
c コタンな味わいのある絵。

② a 店がハンジョウしている。 b シンシュク自在の素材だ。
c 味方をコブする。

③ a ハンカな通りが続く。 b 手紙の末尾にツイシンを記す。
c 資源がコカツする。

④ a 安価でハンバイする。 b 遠足はジュンエンされた。
c 推薦されたがコジした。

⑤ a 生物がハンショクする。 b 政界にゲキシンが走る。
c エイコ盛衰は世の常だ。

〔問16〕 芽生えの初期にとあるが、「芽生えの」の「の」と意味・用法が同じものとして最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 私には行くところがあるの。
② 会社の同僚と話し合う。
③ 花の咲く頃にまた会おう。
④ あの人は行ってしまった。
⑤ この本は君のだろう。

〔問17〕 人為的にとあるが、この「人為」と同じ構成の熟語として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 官製
② 批判
③ 傑作
④ 徹夜
⑤ 去就

〔問18〕 秋に結実する多くの種類の植物の種子は、結実後すぐに発芽せず、春に発芽しますとあるが、その理由の説明として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 春と比べると秋は気温が低いので、種子が発芽するために必要な条件が整わないから。
② 春と秋の気温差はほぼないが、春は秋と比較して気温が上昇しやすい傾向があるから。
③ 秋に結実した種子がすぐに発芽してしまうと、種子に含まれる栄養が少なくなるから。
④ 秋に結実する種子は、冬に発芽してしまうことを防ぐようなしくみをもっているから。
⑤ 結実した後に植物の種子が発芽するまでには、一定程度の時間の経過が必要だから。

〔問19〕空欄 X に当てはまる文として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 暖かい室内にシャーレを置いておけば、ほとんどの種子が発芽します
② シャーレに水を補給し続けることで、ほとんどの種子が発芽します
③ 寒い室内にシャーレを置いておけば、ほとんどの種子が発芽します
④ 暖かい室内にシャーレを置いていても、ほとんど発芽しないでしょう
⑤ シャーレに水を補給し続けなければ、ほとんど発芽しないでしょう

〔問20〕この文章の論の展開の仕方についての説明として最も適切なものは、次のうちのどれか。

① 「コムギやライムギ」といった身近な植物を例にして春化処理の概念を紹介した上で、その概念について実験を用いて詳しく説明している。
② 春まき性の品種と秋まき性の品種の特徴を挙げて対比させながら、春と秋の気温差を活用した二期作での栽培方法を詳しく説明している。
③ 二期作でしか栽培できない植物を例に多くの収量を得るための方法を紹介し、農業をする上で植物の特徴を知ることの大切さを説明している。
④ 実験結果を用いて秋まき性の植物の春化処理について説明し、全ての植物にとって秋に発芽して寒さを体感することの必要性を指摘している。
⑤ 春化処理を必要とする植物を細かく分類して共通点と相違点を明らかにした上で、寒さに耐えて冬の通過を待つ植物の性質を説明している。